

紹介

鬼頭 清明著

『律令国家と農民』

本書『律令国家と農民』は、『日本古代国家の形成と東アジア』（一九六七）や『日本古代都市論序説』（一九七七）を叙述され、つねに新鮮で大胆な問題を提起され続けている鬼頭清明氏の近著である。

著書鬼頭氏は、「あとがき」でつぎのように述べている。

本書で明らかにしようとしたのは、八世紀に成立した律令国家と農民との関係を、東アジア諸国、中国や朝鮮を含めた視野のなかで検討しようとしたものである。八世紀においては、中国、朝鮮、日本の民衆は、一応形式的にはいずれも律令制という支配をうけた。それでも、それぞれの国家と農民の關係は個性をもっている。この共通性と特殊性との歴史的由来をできるだけ具体的にひきあけてみたものである。そ

うすることによって、日本の古代の農民がうけていた支配の特質をすこしも明らかにすることができるのではないかと考えたのである。

ここには、本書の目的と内容が簡潔に指摘されている。七〇年代の日本古代史の最も大きな成果は、石母田正『日本の古代国家』（一九七二）であるが、それによって「国家成立史における国際的契機」や「第一次の生産関係としての首長制」などが新しく提起された。この研究動向は、さらに「東アジアにおける律令制と社会構成」としても展開されている。本書は、石母田氏が提起した諸問題のうち、おそらくさきの二つを念頭におき、しかもそれを克服しようとしたきわめて意欲的な努力作である。したがって、まことに多面的でしかも注目すべき多くの指摘が含まれているが、まずその一端を紹介しておきたい。

で、小農経営を比較史的な視点として設定し、小農の「自立性の如何」によって、芝原拓自氏・原秀三郎氏が規定された國家的奴隸制概念（芝原『所有と生産様式の歴史理論』一九七二ほか）を第一段階と第二段階に細分し、その段階を「収取体制の政策基調」を分析することによって明らかにする。中国では漢代が第一段階、北魏・唐代が第二段階である。一方、八世紀日本では政策理念とことなつて、実際には小農を掌握する収取体制は実現せず、依然として第一段階に止まっていた。在地における農業経営のあり方からも、家父長制的世帯共同体の労働過程における自立性は弱いと考えられ、首長層の恣意による収奪を排除するために、家父長制的世帯共同体の平均正丁数三〜四人を基準に編成した郷戸も、収取体制の基礎単位として安定していなかったのである。しかも、八世紀日本の家父長制は未成熟で、同じ第一段階の漢代では家族形態が単婚小家族であったのとまったく異なっていた。おわりに、首長制「第一次の生産関係」論を階級社会と無階級社会との

区別を曖昧にするとして批判し、アジア的
国家形成論へ接近するために政治的上部構
造として把握する。

第二部では「東アジアの国家類型」が検
討される。第一に、第一部で検討したよう
に、日本律令国家は「先取りに形成され
た」のであるから、その成立は国内条件と
国際的契機から全体として説明しなければ
ならず、第二に、八世紀日本を国家的奴隸
制と規定するためには、物質的基礎である
国家機構その形成を問題とせざるをえない。
そこで、日本律令国家(古代国家)の成立
が課題となる。エンゲルス『家族・私有財
産・国家の起源』を普遍的妥当性をもちう
ると考え、国家の「四つの指標」を基本に
すえて、アジアにおける未開上段に首長制
的社会を考慮し、対外関係ばかりでなく社
会的分業の問題を重視する。中国の国家形
成は、商鞅の変法を「一つの画期」として、
共同体が解体してしまわないうちに、社会
的分業の一定の発展と対外的契機とを媒介
に進行した。朝鮮では、高句麗が四〜五世
紀に、百済が六世紀に、新羅が七世紀にい

ずれも対外的契機を媒介に国家を形成した。
日本古代国家の形成は対外的危機に際して
権力集中の方法として行なわれたので、天
智朝に①官僚機構の整備と②それを支える
租税制度の形成がしられ、淨御原令制下に
③人民の地域的区分と④常備軍が成立し、
大宝令制による律令国家として完成した。
このように、東アジアにおける古代国家の
形成は、社会的分業と対外的契機を前提と
して成立した中国古代国家と、対外的契機
を主要な要因とする朝鮮・日本の古代国家
という二つの対照的な類型にわけることが
できる。

本書の豊富な内容はこれでつぎるもので
はなく、右に紹介したところは、とりわけ
注目すべき指摘と考えられるものに限られ
ている。そこで、大きな特徴をまとめてお
くと、つぎのようであろうか。

- (1) 石母田氏の「第一次の生産関係とし
ての首長制」論と、中村哲氏の国家的
奴隸制論(『奴隸制・農奴制の理論』、
一九七七)とを批判し、芝原氏・原氏
の国家的奴隸制概念をさらに発展させ

たこと。

- (2) (1)を基礎として、日本古代史のみな
らず、中国史・朝鮮史を具体的に分析
したこと。

- (3) 国家論に對外的契機とともに社会的
分業を導入し、とくにアジアの場合に
は對外的契機が「共同体的諸關係の強
いことによつて大きな位置を占めるこ
と」を指摘したこと。

- (4) (3)をふまえたうえで、先に著者が提
起した「諸國家支配層の国内矛盾と國
際的利害關係」に規定される「國際的
政治世界」論(『日本古代國家の形成
と東アジア』)を基礎に、その内部で
達成される東アジア諸國の國家形成を、
主体性を重視しながら二つの對照的な
類型として把握したこと。

- (5) 日本古代國家の完成を大宝令による
律令國家にもとめたこと。

著者は設定した課題を達成するために、
中國史・朝鮮史のみならず考古学・人類学
の成果をも広く吸収されている。このよう
な著者の姿勢は、後学として積極的に学ん

でいかねばならない。

本書については、おそらく様々な立場からの批評が加えられることになると思う。

それは、著書の主張が明確でしかも新鮮・大胆であるからであり、また本書がすぐれて高度な内容をもっているからである。七〇年代の終わりを飾るにふさわしい労作であることを、あらためて指摘しておきたい。なお、著者には本書とくに深く関わるものとして、「倭からヤマト政権へ」(『日本と朝鮮の古代史』一九七九)、「東アジア諸国家の形成と国際的政治世界」(歴史学研究会別冊特集『世界史における地域と民衆』一九七九)があるので、あわせて参照されるところと思う。

(B6判 二五〇頁 一九七九年九月
精選書 一七〇〇円)
西山良平 日本学術振興会奨励研究員

S・ギーディオンの著

前川道郎・玉腰芳夫訳

『建築、その変遷——古代ローマ
の建築空間をめぐって——』

本書は Siegfried Giedion, *Architektur*

und das Phänomen des Wandels—Die

drei Raumkonzeptionen in der Architektur

(Tubingen, 1969) の邦訳である。著者ギー

ディオンはスイス人の建築・美術史家で、

世界の建築界に多大の影響を与えた *Space,*

Time and Architecture—The Growth of a

New Tradition (1941) 他の著書があり、

そのいくつかは邦訳されている。彼は既に

一九六八年に世を去っており、本書は彼の

死の翌年に出版された遺著の邦訳である。

この邦訳では、訳者により意図的に副題

が改められているが、原著の書名を直訳す

れば『建築と変遷の現象——建築における

三つの空間概念』となるように、著者ギー

ディオンは建築における三つの空間概念の

展開段階を区別する。著者自身本書の序論

で述べており、訳者あとがきにも解説され

ているが、ギーディオンは一九四一年出版

の *Space, Time and Architecture* にお

いて、パロックの空間の論議より始めて、

第三の空間概念の開始期としての近代の時

空概念に支えられた建築として、内部と外

六二年の *The Eternal Present: The Beg-*

innings of Art にきいて、第一の空間概

念としてエジプトとシュメールを中心に、

彫塑的形態としての外部空間の建築を論じ

た。そして遺著となった本書において、第

一の空間概念の最終段階としての古代ギリ

シアの建築空間をも論じながら、しかも近

世につなぎつつ、焦点を古代ローマに合わ

せて、内部空間としての第二の空間概念の

建築を詳しく論じているのである。したが

って本書は古代ローマ建築史の極めてユニ

ークな書になっているのであり、そこに、

訳者をして副題を改めせしめた理由の一つ

が存するのである。

本書の内容を簡単に紹介すれば以下のよ

うになる。序論に続いて第一章では、彼の

いう第一の空間概念のうちの最終相である

ギリシアの建築が論じられ、第二章では、

第二の空間概念への移行期が取り扱われる。

そして、第三章が第二の空間概念を扱う本

書の本章というべき部分である。第二の空

間概念とは、古代ローマ、中世、ルネッサ